追手門学院大学附属図書館

『宮本輝ミュージアム』

2008 年、学校法人追手門学院は創立 120 周年を迎えます。
『宮本輝ミュージアム』は、その記念事業の一環として、追手門学院大学附属図書館の改修と同時に併設いたしました。

広く一般の方へも公開いたしますこのミュージアムは、本学文学部第 1 期卒業生であり、作家として活躍されている宮本輝氏の愛用品、直筆原稿など、数多くの資料を展示し、宮本輝氏の著作等を通して、図書館を利用される学生及び市民の方々に感動と共感の場を提供できることを願って開設いたしました。そして宮本輝氏のご活躍とともに成長し続けるミュージアムでありたいと願っています。

『宮本輝ミュージアム』を通して、追手門学院大学が皆様にとって、より身近な存在となりましたら幸いです。

2005 年 5 月 21 日

『宮本輝ミュージアム』展示品リスト

【東側】

◎年譜　　◎自筆の詩（ガラス板）

≪年譜下ガラスケース≫

●広辞苑　●インクと万年筆　●直筆原稿（複製）「生きものたちの部屋（3）『インクと万年筆』」
●湯のみ　●懐中時計（芥川賞正賞）　●グラス　●小物入れのかご　●水差し　●墨、筆
●硯　●自筆の書「正直であるということの凄さ」（複製）
○追手門学院大学第一期生卒業記念アルバム（在学中の写真）・第二期生卒業記念アルバム（茨木学舎全景）
○追手門学院大学三十年史　「創立三十周年を祝して（宮本輝）」
○読売新聞記事　昭和 57 年（1982）7 月 26 日（月）夕刊　1 面・3 面　パネル

【北側・展示架】

① 作家活動のはじまり

1977 年デビュー作「泥の河」と「螢川」を相次いで『文芸展望』に発表。「泥の河」で第 13 回太宰治賞、「螢川」で第 78 回芥川龍之介賞を受賞した。この 2 作は 1978 年に発表された「道頓堀川」とともに「川三部作」として著者の代表作となった。

『螢川』『道頓堀川』『川三部作　泥の河　螢川　道頓堀川』『幻の光』『星々の悲しみ』

② 初期の作品

芥川賞受賞後、肺結核を発病し、約 2 年間の療養を余儀なくされた。復帰後、旺盛な創作活動が開始される。

『ドナウの旅人（上・下）』　『錦繍』と冒頭部分原稿（複製）

③ 初めての海外取材

1982 年「ドナウの旅人」執筆取材のため、ドナウ川流域を訪問。以後、毎年のようにヨーロッパ諸国等へ取材旅行。

『異国の窓から』

④ 映画化された代表作

1982 年「泥の河」が小栗康平監督によって映画化され、モスクワ国際映画賞銀賞ほかを受賞した。

以後、多くの作品が映画化、ドラマ化されている。

「優駿」競走馬の世界を描いた作品で、日本中央競馬会から第一回馬事文化賞を受賞。

1987 年に吉川英治文学賞を受賞し、1988 年映画化された。

『優駿（上・下)』　映画『優駿』DVD と映画パンフレット　　映画『幻の光』　ビデオ

⑤海外を舞台にした作品

『愉楽の園』　タイを舞台にした作品。著者が最初に書いた小説「弾道」が作品の原型となっている。

⑥青春時代を描いた作品

『青が散る』と連載第 1 回冒頭部分原稿（複製）　　新設大学に入学した椎名遼平はテニスコートのないテニス部に所属する。遼平の恋や友情、青春をテニスとともに描いた作品。

『春の夢』『二十歳の火影』

⑦“父と子”を描くライフワーク『流転の海』

敗戦後の昭和 22 年、50 歳で長男を得た松坂熊吾の半生を描く大河小説。1982 年著者 35 歳の年に、全 5 部の予定で執筆が開始された。2004 年『新潮』6 月号より第 5 部「花の回廊」の連載開始。

連載第 1 回冒頭部分原稿（複製）と『流転の海　第一部』(福武書店)

第 1 部『流転の海』　第 2 部『地の星』　第 3 部『血脈の火』　第 4 部『天の夜曲』(新潮社)

⑧青春と読書

13 歳の日、井上靖著『あすなろ物語』を読んで以後、読書に耽溺した。本や小説は、波間にただよう小舟のような、14 歳から 18 歳までのよるべない時代の支えのような存在であっただろう。

『本をつんだ小舟』思い出の作品と読書体験を記した作品。宮本輝編纂のアンソロジー集

⑨『川三部作』

筑摩書房　1985 年刊。限定 200 部中の第 187 番

⑩作家　宮本輝を知る本

『新潮四月臨時増刊　宮本輝』新潮社　1999 年 4 月刊

⑪「優駿」

連載第 1 回冒頭部分原稿（複製）

⑫海外に翻訳された作品

1986 年の『泥の河』中国語版発行以後、中国語、フランス語、英語、ハングル語、ロシア語などへの翻訳書が多数刊行されている。

『彗星物語（上・下)』(原書　角川書店 1992 年刊）とハングル語版（Koreaone Press1993 年刊）訳者は金賢姫

⑬恋愛をテーマにした作品

『私たちが好きだったこと』

⑭「ドナウの旅人」以降の新聞連載（１）

『花の降る午後』角川書店　1988 年刊（1985 年 7 月～1986 年 2 月『新潟日報』等に連載）

『海岸列車（上・下)』毎日新聞社　1989 年刊（1988 年 1 月～1989 年 2 月『毎日新聞』連載）

『ここに地終わり海始まる』講談社　1991 年刊（1990 年 3 月～11 月『福島民友』等に連載）

⑮「ドナウの旅人」以降の新聞連載（２）

『朝の歓び（上・下)』講談社 1994 年刊（1992 年 9 月～1993 年 10 月『日本経済新聞』連載）

『人間の幸福』幻冬舎　1995 年刊（1994 年 5 月～1995 年 1 月、『産経新聞』連載）

『草原の椅子（上・下)』毎日新聞社 1999 年刊（1997 年 12 月～1998 年 12 月『毎日新聞』連載）

『約束の冬（上・下)』改訂版文藝春秋 2004 年刊（初版 2003 年刊）（2000 年 10 月～2001 年 10 月『産経新聞』連載）

⑯阪神淡路大震災後の作品

作家自身もこの大震災によって被災した。震災の渦中、日々増大していく被害は、連載終盤を迎えていた『人間の幸福』最終章にも影響を与えた。

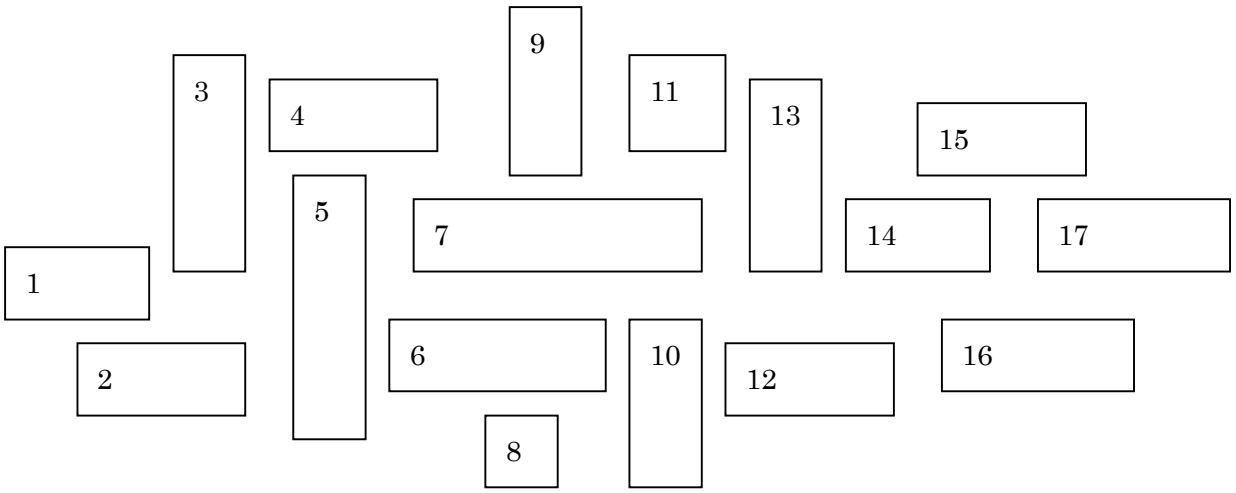
『森のなかの海（上・下)』震災当日の朝から始まる物語

⑰シルクロードへの旅

1995 年 5 月、約 1700 年前に膨大な経典の漢語訳をなした鳩摩羅什（クマラジュウ）の足跡を辿る 40 日間にわたるシルクロードの旅に出た。**『ひとたびはポプラに臥す』旅の紀行文集**

『星宿海への道』　『胸の香り』シルクロードの旅に題材をとった短編「道に舞う」を収録。

北側展示架番号　※上記番号は展示架の番号です



特別展示　『川三部作』展

展示品リスト（展示期間 2007 年 10 月 10 日～2007 月 12 月 21 日）

【展示ケース内】

＜表面＞
●川三部作それぞれの初出となった文芸展望 3 冊
　1977 年 18 号、同 19 号、1978 年 21 号
●「自作の風景～宮本輝さん『泥の河』の安治川～」
（読売新聞 2006 年 6 月 8 日夕刊 6 面）
●翻訳版
・「La rivière aux lucioles」(フランス語版　螢川)
・「河的星塵往事」(中国語版　川三部作)
●芥川賞受賞当時の記事
・文藝春秋 1978 年 3 月特別号
・朝日新聞 1978 年 1 月 18 日・2 月 27 日朝刊
●「螢川」(筑摩書房)　帯違い 2 種類
・右(1978 年 2 月 1 刷)　芥川賞受賞
・左(1983 年 12 月 9 刷)　映画化
●「川三部作」の様々な表紙
・『螢川』5 種類（角川文庫）
・『川三部作 泥の河 螢川 道頓堀河』(ちくま文庫)
・『螢川　泥の河』（新潮文庫）

＜裏面＞
●映画パンフレット
「泥の河」「螢川」「道頓堀川」
●「宮本輝ミュージアム開設 1 周年記念対談」
―宮本輝・小栗康平－
※2006 年 5 月 27 日　本学にて開催
（読売新聞 2006 年 6 月 25 日 36 面）
●「螢川」DVD
●『キネマ旬報』
・「螢川」特集記事(1978 年 3 月上旬号)
・「道頓堀川」特集記事(1982 年 6 月下旬号)
●『シナリオ』
・「泥の河」特集記事（1981 年 6 月号）
・「螢川」特集記事（1987 年 3 月号）
●直筆原稿（複製）
「流転の海」シリーズ
・第三部「血脈の火」冒頭部分
・第四部「天の夜曲」冒頭部分

【パネル展示】

● 『川三部作』
・「泥の河」「螢川」「道頓堀川」それぞれの作品・作品舞台紹介
・「泥の河」：太宰治賞受賞について（歴代受賞者）
● 「『川三部作』を終えて」　（1981 年 6 月 20 日　毎日新聞夕刊 4 面）
● 「川三部作」豪華愛蔵版（筑摩書房）
限定番号・筆者肉筆書名入、オリジナル版画付（限定 200 部のうち 187 番）

【西側】

● 「川三部作」関連の雑誌記事（ファイル展示）
※「泥の河（初出タイトル：舟の家）」「螢川」「道頓堀川」の初出。
※　川三部作はそれぞれ発表の過程で大幅に書き直されている。

【モニター】（視聴可）

● 「泥の河」の舞台をたどる　（2006 年当館オリジナルビデオ）
● 「『泥の河』を語る」宮本輝氏・小栗康平氏の対談　（2006 年当館オリジナルビデオ）

【映画ポスター・スチール写真】

● 「泥の河」名場面写真
● 「道頓堀川」ポスター

〒567-8502　大阪府茨木市西安威 2-1-15
追手門学院大学附属図書館『宮本輝ミュージアム』
2005 年 5 月 21 日発行　2007 年 10 月 10 日改訂（第 7 版）